

多摩デポ通信 第23号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2012年7月13日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

●HP <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

5年目の

多摩デポ通常総会

開かれる

5月20日(日)、国分寺労政会館で2012年度通常総会が開催されました。今年度は、法人の活動が始まって5年目の節目の年です。また、都立図書館のあり方検討委員会報告(「都立図書館のあり方について」最終報告)が出されてからは、10年がたちました。

冒頭、座間理事長から「2つの節目を重ね合わせ、皆さんとこれからの方向性について議論を進めて行きたい。総会では2012年度の活動計画を決めていくが、総会終了後の後半のパネルディスカッションでは今年度のことだけではなくこれから先のことを議論したいと考えている」と挨拶がありました。

2011年度事業報告では、除籍予定図書が多摩地域最後の2冊検索作業は東大和市の一部を行ったこと、図書館資料の里親探し事業

第14回・多摩デポ講座

電子書籍よ、さようなら

凜とせよ公共図書館

—印刷本の面白さを未来に残すために—

8月5日(日) 午後2時～4時30分

講師：堀越洋一郎氏 (武蔵野美術大学元教授・現非常勤講師)

星俊雄氏 (日外アソシエーツ勤務)

会場：調布市市民プラザあくろす あくろすホール②

京王線国領駅北口徒歩1分 コクティアー3階

調布市国領町2-5-15 電話：042-443-1211

参加費：500円 定員：50人 先着順

申し込みはメール (depo_tama@yahoo.co.jp) またはFAX (042-484-3945) で

NPO法人共同保存図書館・多摩

NPO会員だけでなく、どなたでも参加できます

では、多摩地域内での交換に加え、将来的に東日本大震災被災図書館で失われた資料を補う形で役立てることを考えて一時保存もしていること、多摩デポブックレット5号・6号の発行、3回の多摩デポ講座実施について説明がありました。

また、「東京都立多摩図書館移転構想」について都に質問書を手渡したこと、10月に多摩地域で開催された第97回全国図書館大会の資料保存分科会の企画・運営や東京都多摩地域公立図書館大会への協力・参加、東日本大震災被災図書館(福島県矢吹町や岩手県陸前高田市)の支援に日本図書館協会を通じて参加したことなども報告されました。次に決算報告、監査報告が行われ、いずれも承認されました。続いて2012年度事業計画案及び予算案が審議されました。①4年目になる

除籍予定図書検索の対象自治体を広げていく②図書館資料の里親探し資料の対象範囲や対象施設の拡大を図る③多摩デポ講座に加え、除籍や資料保存に関する研修会を企画・実施する④図書館総合展ポスターセッションへの参加⑤東京都多摩地域公立図書館大会への協力・参加⑥仮想空間で情報を共有化し保存と廃棄を行うための仕組みの調査・研究⑦東京都立多摩図書館移転構想の分析・研究・提言や館長協議会の『多摩地域における共同利用図書館検討調査報告書』の分析・普及⑧ホームページの充実やメーリングリストの立ち上げ⑨東日本大震災被災地図書館への支援の継続、などについての提案があり、予算案とともに承認されました。

総会終了後、引き続き、パネルディスカッション「多摩の共同保存のいまま

でとこれから」が開催されました。前日の朝日新聞に記事が掲載されたこともあり、会員外の方も6名ご参加くださいました。

終了後の懇親会には、総会出席会員のほとんどが参加、賑やかに懇談が行われました。

パネルディスカッション 「多摩の共同保存のいまま までとこれから」報告

パネリスト..

雨谷逸枝さん

(元都立図書館職員)

手嶋孝典さん

(元町田市立図書館長)

中村照雄さん

(八王子市立生涯学習センター館長)

〈発言順〉

コーディネーター..

齊藤誠一さん

(元立川市図書館職員)



参加者..29名

はじめに

東京都の図書館は、都立図書館の役割を明確にし、あらたな図書館を示すとした方向で計画を検討し、2001年7月に中間報告がなされ、翌年の2月(報告書の日付は1月23日)にその報告である「都立図書館のありかた」を公表した。それ以来、日比谷図書館の区への移管、多摩図書館のマガジンバンク化など目まぐるしい動きが見られた。またビジネス情報提供など

の新たなサービスを展開しているが、一方では多くの資料を除籍し続けている。

しかし、そのことが多くの人に伝わっていない。今回は、その経過を振り返って整理を行い、今後我々がどう動くかを考えてみたい。

雨谷さん発言要旨

これまでの都立図書館の役割を中心に説明された。かつて多摩地域に3館（八王子、立川、青梅）あった都立図書館は、都立として存続するために、役割分担をし、参考図書・逐次刊行物・行政郷土資料の収集と市町村立図書館への貸し出しに力を注いだ。この3館を統合し、1987年、現在の地に都立多摩図書館が開館した。都立多摩は、都立中央と地域分担しつつ協力サービス事業を柱に機能分担するという時代が続き、

市町村立図書館とともに都民への図書館サービスの向上を目指していった。

都立図書館の「再活用」の概念は、都立中央開館時点では「区市町村で収容保存ができない資料を受け入れて協力貸出を通じて都民全体で利用できるようにする」というものだったが、2002年2月の「都立図書館のあり方」では区市町村等への払い下げに変わってしまった。業務は上意下達で再編縮小している。

協力貸出も貸し出す資料の限定・貸出期間の短縮など運用面で制限が厳しくなっている。特に、閲覧を借用した区市町村立図書館の館内に制限するのは問題が大きい。働き盛りの市民等が図書館に日参することなど極めて難しいのに。

国会図書館での資料のデジタル化が進められ、電子書籍などの流通も始まって

いるが、まだまだ紙媒体の時代は続く。

私たち多摩デポは、方針を一方的に変更した都立の翻意を促しながら、多摩地域の図書館資料の共同保存を考えていく市町村立図書館の支えになりたいと思う。

手嶋さんの発言要旨

都立図書館による2001年の中間報告で再編計画や14万冊の本を廃棄するとういう衝撃的な計画が明らかになり、住民や図書館職員たちで反対集会を行った。江戸川区が大量に引き取ったが、残りの約5万冊を町田市で再活用をめどが立つまで一括預かることにした。幸い市内に廃校になった小学校があったためそこに保管することができたが、そこに至るまでに紆余曲折があり大変であった。最終的には、多摩地域で0冊ないし1冊しかない本を各自治

体で分けて保存している。

滋賀県では、都の計画が出る10年ほど前から、市町村の図書館が持ちきれない資料を県立図書館で保存し市町村へ貸し出すということをしている。東京都の計画は、再活用とは言えない現場からかけ離れたものである。

中村さんの発言要旨

2010年3月に都立中央図書館から、八王子市に一括移管された多摩地域資料約24000冊について、国の補助金を受けて整理をこの3月に終了した。現在中央図書館の書庫に保存しているが、スペースが限られているため、原則一冊のみの整理となり、約17000冊にとどまった。副本については、整理せずに箱に詰めて保管している。現在運用計画について検討中である。

齊藤

多摩地域の図書館では年間約50万冊の本が廃棄されている。資料をいかに保存していくかということの大切さも我々は知った。都立図書館の廃棄に反対するだけではだめで、共同保存図書館の必要を強く感じた。

その後も都立図書館では多くの本を廃棄し続けており、今も続いている。特に地域資料は、収集するのが困難な分野であり、昨年の震災のような大災害が起こった場合を鑑みると二か所以上の図書館で持つべきである。

私が立川市に勤務していたときに、年配の方から経済ジャーナリストの小汀利得さんの本をリクエストされたが、都立図書館の本は、昭和25年以前の本は貸出不可となっており借用できなかった。かなりのお年だったので、都立図書館へ行っ

てくださいとは言えなかった。結局他の自治体の図書館から取り寄せたが、これはどういうサービスなのか疑問に思った。

参加者Aさん

保存を考えると図書のデジタル化は避けられないのでは？保存で分担はできないか？また滋賀県はすでに仕組みができているのか？

齊藤

現物の利用は、どうしても必要である。特に地域資料がそうである。各市町村の図書館の書庫は、どこも満杯である。多摩地域で最後の一冊を保存する仕組みを作りたい。滋賀県は仕組みとスペースが確保されている。

都立多摩図書館が国分寺市に移転する計画があり、保存するスペースがかなりある。保存機能を十分持たせる等を含んだ質問書を出したが、東京都には受け取

りを拒まれた。

参加者Bさん

このような一連の東京都の計画は、なぜ出されたのか？

雨谷

公式には、社会情勢の変化と地域の図書館の充実により都立の業務を見直すということだが、財政状況が厳しいこと、定数削減の方針の下、団塊の世代大量退職後の補充が見込めないことへの対策だろう。

まとめ

資料のデジタル化も必要ではあるが、現物資料は保存していくべきである。都立図書館で困難であれば、各自自治体共同で保有するデジタルライブラリーが必要である。意見があればどんどん出して欲しい。メーリングリストなどを活用してその情報の共有化を図っていききたい。



感想

国分一也

中村氏の報告から地域資料を散逸させまいという強い信念を感じた。限られたスペースや予算及び人員に大変苦慮しながら、八王子市民以外にも広く活用したいという姿勢に、深く感銘を受けた。

私の勤務する館で引き取って整理した都立図書館旧蔵本のうち、書棚8段分しかwebで公開していないが、相互貸借の依頼がぼつぼつ来ている。借用自治体で、すべて館外貸し出し可としているので、家で本を読みたいという利用者は間違いなくいることを実感している。利用者が動くのではなく資料が動くこと。我々第一線の図書館は、保存をし

ながら利用もするというスタンスは、今後も持ち続けたい。デポジットライブラリーの設立までは、息の長い運動となるであろうが、一歩ずつ前進していきたいと思った。

多摩デポブックレット⑦ 『多摩を歩いて三十七年半』 元アサヒタウンズ記者が 語った多摩

東京・多摩地域で何らかの活動をしてきた人で、朝日新聞に折り込んで配布された地域紙『アサヒタウンズ』を知らない人は少ないだろう。同紙は2010年3月に廃刊されたが、部数の多さ（本書によれば50万部）や、文化的・水準の高さなどから惜しむ声は多い。本書は、1972年の創

刊時に入社し、廃刊までの年月を、記者として多摩地域の市民のさまざまな情報を伝え続けた著者による講演の記録である。同紙が、多摩地域がどのような状況の時に生まれ、どのように紙面をつくり豊かにしてきたか、市民をつなぐ役割を果たしてきたか、紙面の背後に活発な市民の活動があったかなどのが、記者の仕事を通して生き生きと語られている。

著者は企画や取材の思いを、「こういう素晴らしい仕事をしている人がいる、こんな素晴らしい場所がある」「こんな理不尽なことが起きている」（例：日の出町ゴミ処分場問題や圏央道ほか）ことを知らせたい、と語る。忘れられない仕事のひとつとして紹介されている、女性が「働く」シリーズは、全236回の登場者と仕事の一覧表も掲載されている。

また、市民の活動を支えた図書館や公民館についての記事が語られているのも、この会の催しらしく興味深い。

他に「多摩再発見 みんなの図書館」20回、『アサヒタウンズ』保存の多摩地域図書館リスト等も掲載、用語解説も随所に付けられ、参考になる。（会員T・Y）



『第8回多摩デポ講座 多摩を歩いて三十七年半』街人、暮らし、そして図書館』山田優子著／特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩発行

陸前高田市立図書館 郷土資料救済支援活動 （第二期）も無事終了

岩手県陸前高田市立図書館郷土資料救済支援活動（第一期）については、前号の通信で報告をいたしました。その後、第二期の活動が6月3日から5日に実施され、今回も多摩デポから3名がボランティアとして参加をしましたので、ご報告いたします。

今回は、岩手県立図書館の活動に、国立国会図書館と日本図書館協会資料保存委員会が技術指導の面から協力、「[Help-Toshokan]」図書館支援隊（東日本大震災修理ボランティア・多摩デポ）と盛岡大学がボランティアとして参加し、作業場所の岩手県立博物館の方もお手伝いくださって、延べ

50人が作業に従事しました。

第二期活動は、3月の第一期活動で全壊図書館から救出した約500点の郷土資料のうち、代替不能で手当てが必要と判断された約260点の図書と図面、壁新聞に貼られたり箱に入っていた写真を対象とし、乾燥・ドライクリーニング・消毒と今後の処置毎の仕分け作業等が行われました。

今回作業を終えた図書は、第三期以降の活動として、複製作成、蔵書復元、修復等の方策を検討中で、岩手県立博物館の冷凍庫に保管されています。写真は陸前高田市教育委員会に選別確認をいただく予定です。

なお、残念ながら今回57冊の図書が復元不能と判定されました。これらは国立国会図書館と日本図書館協会資料保存委員会が譲り受け、被災資料研究に活用されます。



陸前高田市立図書館郷土資料救済支援活動(第二期)レポート

中澤 和男

5月26日、当初参加予定の齊藤誠一さん(多摩デポ事務局長)から参加打診あり。交代を快諾。世話役の吉田光美さん(日図協東日本大震災対策委員、多摩デポ事務局)より詳細な活動要綱等が添付されたメールが届く。鉄道に詳しくJR

びゆう会員の中川恭一さん(西東京市谷戸図書館長、多摩デポ会員)が格安の新幹線(大宮―盛岡)とホテル・メトロポリタン盛岡のセット券を手配してくれた(新幹線往復+2泊3日朝食付+飲物・買物券付で32400円 *日図協から16000円補助あり)。

6月3日(9時22分盛岡着、10時半にホテル・メトロポリタン盛岡ロビー集合、その後乗合タクシーとワゴン車で岩手県立博物館へ)。駐車場で午後5時まで作業を行う。大津波に襲われて壊滅的な被害を受けた陸前高田市立図書館の郷土資料で自衛隊員により図書館周辺から回収された資料。そのうち岩手県立図書館未所蔵のものを含む約260点について海水で付着した頁を破れないように慎重に一頁ずつ剥がして天日に曝し干す作業を行った。幸いに

も好天に恵まれ順調に進んだ。人体に有害な微生物が浸み込んでいる可能性があるとのことで全身を包む作業着、キャップ、マスク、ゴーグルなどを装着して作業した。資料には汚泥もかなり付着していた。眞野節雄さん(都立中央図書館、日図協資料保存委員会)、岡橋明子さん(国会図書館)の指導のもと、初日は14名が参加した(岩手県立図書館2名、盛岡大学1名、日本図書館協会[Help-Toshokan]図書館支援隊11名(多摩デポ3名を含む)。*この他、期間中に岩手県立博物館から2名が飛び入りで参加)。作業終了後午後6時から盛岡駅近くの「うま舎」で懇親会。16名参加。

6月4日(午前9時から午後5時まで作業。前日の好天のお蔭で資料がよく乾いており予想以上に作業が捗った。しかし、写真中心の

資料の付着した頁を剥がすのは容易でなかった。午前中昨晚の懇親会に参加した斎藤力也さん（岩手県立図書館）が地元の銘菓と飲物を差し入れてくれた。また宮敏子さん（岩手大学非常勤講師）ほか多くの方々差し入れがあり休憩時の茶菓は潤沢だった。作業終了後、午後6時から岩手県立図書館員で今回の支援活動の担当者の澤口祐子さんの案内で「いわて県民情報交流センター（アイーナ）」のなかにある岩手県立図書館を見学した。その後10名ほどで盛岡駅近くのHot Jajaで盛岡じゃじゃ麺を食べた。

へ6月5日▽早朝、朝食前に一人で「石川啄木新婚の家」
「賢治清水」^{しみず}などを見る。
午前9時から午後4時まで作業。
この日も好天である。し

かし作業着で全身を覆っているので日差しが強いと熱中症になりそうである。木陰を求めて作業テーブルを何回か移動する。

昼食時に岩手県立博物館の「喫茶『ひだまり』」からわずかに雪の残る岩手山（2038メートル）の美しい山容を眺める。

午後は技術指導の眞野節雄さんから渡された地元老人クラブ連合会の記念誌の復旧に努める。当初は難しいと思われた資料が概ね解読可能となった時にはなぜか涙がこみあげそうになった。他の作業中も、時々扱っている資料に被災者の命が浸み込んでいることを思い涙ぐんだ。歳をとると涙腺が緩くなる。

作業終了後、岩手県立図書館の澤口祐子さんがお礼の挨拶をされた。途中一瞬言葉に詰まり涙ぐまれた。私も思わずもらい泣きしそ

うになった。

午後4時半にホテル・メトロポリタン盛岡のロビーに図書館支援隊の一同が集合。その後解散。各自帰路につく。私は往きと同じく中川恭一さんと新幹線に乗った。



たとえ荷は重くとも

中川恭一

私は、第一期三日間のうち後半の二日間と第二期の三日間に参加しました。鉄道旅行をもう一つのライフワークにしている私にとって、東日本大震災は打

撃でした。未乗区間が宙ぶらりんになったということよりも、存分に風景を人情を味わわせてくれた地方ロ―カル線と地域の人々の被災に心を痛めた一人であり、復興を願いつつも、何か役に立つことはないのかの思いも人一倍感じていました。被災地から離れた図書館人の一人ひとりも忸怩たる思いは同じでしょう。それを挽回するチャンスに恵まれたことは確かでした。

しかし、自然界に生じた地殻変動の嵐は陸前高田市の地に立って初めて実感されるものでした。人々の生活していた証はすべて排除され、変形した鉄筋施設だけがまばらに残る現場は一年が経ったと言ってもとても復興の二文字は浮かんできませんでした。気仙川に架かる大船渡線の橋脚が津波でもぎ取られた現場を目にし、後日計測したら河口

から4・5キロも遡っていたことに気付かされ、改めて恐怖を感じました。

東京から最短四時間でこの地に立てることと、職員六名、隣接する体育館で百余名の命を奪った場所で作業することとの隔絶感は、体感しなければ済まされない苦しい思いの一つです。

黙祷。祈ることしかできない思いを噛みしめながらとにかく潮と泥にまみれた山を崩し、空き地に運び出し、選別しまた山に返す作業に加わることが精一杯の二日間でした。

強風。象徴のように立つ高田松原の一本松。海岸から三百メートルの図書館に吹き付ける強風は透明な空の青さを超えて、がらんどうの館内と作業者のどてっばらを袂り体温を奪います。それでも何かにしがみつくとように作業が進行しました。



盛岡。岩手山を仰ぎ見るレールジャンクションのこの街に来るのは何度目か。透明感のある鮮烈な新緑に囲まれて、明るい日差しの中でドライクリーニング作業は、和やかな中にも真剣な眼差しに支えられての作業でした。

ページをめくるたびに、砂や泥をそぎ落とし、剥がし、水分を取る作業は、気長に一冊一日のつもりでわからないと完遂できません。やっとの思いで発掘した資料が蘇生するかどうかの瀬戸際だから、より丁寧に慎重に再生の息を吹き込むような、頂を極めんと一歩一歩足場を確保して登るような行程でした。一方で、三月の陸前高田、今泉天満宮跡地に建つ「にじのライブラリー」で聞いた主宰者の方の声が蘇ります。亡くなった方たちは氏神様になつて戻ってくるんです。何か



をやるうとしたとき、氏神様がどんどん手助けしてくれるんです。だから、このライブラリーだってあつという間に建つたんです。鎮魂。ここ盛岡の作業場もきつと氏神様に支えられているのだらうとは容易に想像が付きまます。三日間の快晴天もボランティアの成功もそうです。作業に参加した人たち一人ひとりの眼差しの中に、鎮魂の二文字を見つけることができたと思います。

★会の現勢

2012年7月1日

現在

●会員

(個人会員103名)
(団体会員3団体)

●賛助会員

(個人44名)
(団体2団体)

総会以降、続々会費を振り込んでいただいています。まだの方は、入金をどうぞよろしく願います。

●年会費

正会員(個人・団体) 五千元
賛助会員一口 二千元
(個人一口団体五口以上)